

研究発表、朗読、音楽による東広島の戦争・原爆体験の継承 by Peace Bearers

「東広島と原爆」

～被爆者の救護・救援活動を中心として～

目 次

- 1 東広島的主要軍用施設
- 2 傷痍軍人広島療養所
 - (1) 「きのこ雲」と救護活動
 - (2) 元救護班員の手記
 - (3) 原爆詩人 峠 三吉
- 3 海軍賀茂病院併設賀茂海軍衛生学校
- 4 中国第 32050 部隊（広島地区第 14 特設警備隊）
 - (1) 賀北部隊とは
 - (2) 工月 清 元中隊長の手記
 - (3) 賀北部隊原爆被災者救援之碑
- 5 広島県立西条農学校（現 西条農業高等学校）
 - (1) 学徒勤労働員
 - (2) 被爆者救護救援活動
 - ① 西条町内での救護活動
 - ② 「よみがえった都市—復興への軌跡 原爆市長」（浜井信三 著）から
- 6 広島県立賀茂高等女学校（現 賀茂高等学校）
 - (1) 学徒勤労働員
 - ① 第十一海軍航空廠での勤労働員
 - ② 広島陸軍被服支廠学校工場での勤労働員
 - (2) 被爆者救護救援活動
 - (3) 大庭みな子と原爆
 - (4) 原爆でわが子を失うということ
- 7 各町村の警防団及び警察署管内の医療班などによる救援活動
 - (1) 警防団
 - (2) 医療班
- 8 日本赤十字社広島原爆病院（現 広島赤十字・原爆病院）院長 重藤 文夫 氏

1 東広島市の主な軍用施設

1941（昭和16）年「アジア太平洋戦争」開戦により、陸軍の拠点広島そして海軍の拠点呉に隣接する東広島地域（旧賀茂郡）にも軍用施設の建設や防空体制の強化が進みました。

<p>【呉海軍軍需部川上火薬庫】</p> <p>1942年八本松町宗吉に立地。海軍が建設した弾薬の貯蔵及び供給施設でした。戦後は在日米軍が接收し、施設は一時期閉じられていましたが、ベトナム戦争が激化する1967年から弾薬庫としての運用が再開されました。弾薬の貯蔵能力は東アジア最大級といわれています。</p>	
<p>【広島陸軍兵器補給廠八本松分廠】</p> <p>1942年八本松南東部から西条町寺家にかけて立地。広島陸軍兵器補給廠の疎開先として弾薬等の貯蔵庫が多数存在しました。また、大久野島で秘密裏に製造された毒ガス兵器なども貯蔵されていました。現在、施設は残っていませんが、刈又池周辺には陸軍用地を示す標石が点在します。</p>	
<p>【陸海軍原村演習場】</p> <p>1878（明治11）年頃から八本松町原の山野へ陸軍が入村。日清戦争前後から陸軍第五師団や海軍呉鎮守府などの演習場として整備されました。戦後は連合軍が接收し、朝鮮戦争時には国連（英連邦）軍の演習施設となりました。現在は陸上自衛隊の演習場として使用されています。</p>	
<p>【呉海軍中野村聴測照射所（特設見張所）】</p> <p>1942年志和町奥屋の大谷山（東中倉山）に完成。空中聴音機や探照灯、発電所等の遺構や指揮所の建物などが残されています。原爆を搭載したB29爆撃戦闘機（エノラ・ゲイ号）を発見し、「中国軍管区司令部」等に伝えてはいましたが、広島市に空襲警報が出されることはありませんでした。</p>	
<p>【呉海軍板城村聴測照射所（特設見張所）】</p> <p>1944年西条町馬木から大沢にまたがる大迫山に完成。空中聴音機や探照灯などが配備されていました。原爆を搭載したB29爆撃戦闘機（エノラ・ゲイ号）を発見した防空監視哨の一つで、原子爆弾の投下直前に観測機から放たれた自動計測装置や原爆の閃光が確認されています。</p>	

撮影 大石秀邦

2 傷痍軍人広島療養所

(1) 「きのこ雲」と救護活動

右の写真は、西条町寺家の傷痍軍人広島療養所（現 東広島医療センター）に勤めていた鴉田（からすだ）さんが、病院そばの大沢田（おおぞうた）池から原爆「きのこ雲」を写した貴重な写真です。広島市からは約 25 キロメートル離れています。

8月6日、緊急に組織された療養所の救護班は、午前 10 時過ぎに広島市へ向けて出発し、青崎国民学校や広島東警察署付近で救護に当たりました。以降、出動は9月10日頃まで続いたそうです。また、療養所へも多くの被災者が運ばれ、懸命な治療が行われました。



市内へ向かう救護班 提供 広島原爆障害対策協議会



撮影 鴉田藤太郎 提供 広島原爆被災撮影者の会

(2) 元救護班員の手記

朝日新聞社「広島・長崎の記憶 被爆者からのメッセージ」(web版)から転載

坂巻 明子さん(入市被爆 当時 15 歳) 東京都日野市

原爆投下3日目、傷痍軍人広島療養所（現 東広島医療センター）から、救護班の1人として入り早64年が過ぎさっても、何かにつけて思い出すことは懐かしくも恋しくも忘れがたい広島です。広島がない、町がない、家もない、何もない、瓦礫の中に残ったコンクリートの上の真っ黒い塊で、性別も年齢も、大人か子供かも分からないその人の胸が動いたのでした。生涯忘れることなく頭にこびりついて離れません。ずっと後でそれは死後変化ではなかったかと話してくれた人がいましたが、手の施しようもありませんでした。

10歳くらいの女の子の顎に刺さった分厚いガラスはたくさんで、しかも、がっちりと食い込んで取れないし、火傷の人はもうどろどろに化膿していてもマーキュロをぬりその上にチンク油をぬるだけ、そんな患者さんがいっぱい無我夢中でした。

広島にはとても優しい叔父と、叔母がおりました。上流川町14番地でした。燃えさかる火の中で、叔父は倒れた家の梁に挟まれて動けず、叔母は1人では逃げられないと火のなかに飛び込んで2人とも亡くなったそうです。さらに小さい従妹達も犠牲になりました。

やっとの事で逃げおおせた祖母からこの話をずっと後で聞きました。

3日目ですし、焼け野原で探すことも出来なくて何にもなくなった広島を呆然と眺めるだけでした。

原爆のような恐ろしい兵器はありません。60年以上過ぎててもまだ命を脅かされています。憎んでも憎んでも余りあります。

世界中に平和が訪れますように、戦争のない地球でありますように心から祈ります。

[2010年修正]

(3) 原爆詩人 峠 三吉

詩人の峠三吉（さんきち、本名はみつよし）は、1917（大正6）年2月19日大阪で生まれました。幼い頃から気管支の病気に苦しめられ、しばしば咯血しました。広島商業学校（現 広島県立広島商業高校）在学時から詩作にいそしみましたが、卒業後は長期の療養生活を余儀なくされました。

28歳の時、爆心地より3kmの広島市翠町（現 南区翠）で被爆。その後の朝鮮戦争において原爆使用の懸念が高まるなか、1951（昭和26）年に「にんげんをかえせ」で始まる「原爆詩集」を自費出版。病身に鞭打ちながら原爆の惨禍を告発し、その体験を広めました。

36歳の時、気管支の治療のため国立広島療養所（旧 傷痍軍人広島療養所、現 東広島医療センター）に入院。しかし、肺葉切除の手術中に病状が悪化、14時間の苦闘のすえ、被爆から8年後の1953（昭和28）年3月10日未明、手術台の上で亡くなりました。

平和公園内の詩碑は、没後10年目にあたる1963（昭和38）年に建立されました。

【原爆詩集 序（にんげんをかえせ）】

ちちをかえせ ははをかえせ

としよりをかえせ

こどもをかえせ

わたしをかえせ わたしにつながる

にんげんをかえせ

にんげんの にんげんのよのあるかぎり

くずれぬへいわを

へいわをかえせ



広島平和記念公園内の詩碑 撮影 大石秀邦

3 海軍賀茂病院併設賀茂海軍衛生学校

黒瀬の乃美尾村にあった海軍賀茂病院（現 賀茂精神医療センター）は、昭和 19 年 5 月に建設された海軍の病院で、後出する大庭みな子の父も軍医として勤めていました。その後、医療関係者の不足に対応するため、アジア太平洋戦争末期の昭和 20 年 4 月に賀茂海軍衛生学校が作られました。

原爆が投下された翌日夕方、広島市への出動命令を受けた海軍衛生学校の生徒たち約 70 名（歯科医見習生や特別練習生）は、必要な衛生資材をトラック 2 台に積み込み、8 日早朝に学校を出発。昼近くには横川駅付近に到着して救護活動を開始しました。



横川三丁目の広島市信用組合本部前での救護活動
撮影 岸田貢宜 提供 岸田哲平



賀茂海軍衛生学校跡地の碑 撮影 大石秀邦

救護活動の最中に終戦を迎えたため、衛生学校の生徒たちが卒業生として戦地へと送り出されることはありませんでした。

戦後、海軍賀茂病院は国立療養所賀茂病院を経て、現在は国立病院機構賀茂精神医療センターとなっています。近くの広島県立黒瀬高等学校の正門横には、賀茂海軍衛生学校跡地の記念碑が設置されています。

4 中国第 32050 部隊（広島地区第 14 特設警備隊）

（1）賀北部隊とは

戦況の悪化により日本本土での戦闘が想定される中、地元地域の防衛を目的として全国に作られたのが特設警備隊です。広島県内には合計 28 の部隊が作られました。部隊名「中国第 32050 部隊」（広島地区第 14 特設警備隊）は、旧賀茂郡北部の西条・高屋・八本松・志和地域に住む予備兵役の軍人（在郷軍人）や青年男性を対象に、三個小隊からなる中隊二個（工月中隊・高和中隊）で組織され、通称「賀北部隊」と呼ばれました。本部は西条農学校（現 西条農業高校）の北寮に設置され、隊員の中には、西条農学校を卒業して間もない若者や在校生もいました。原爆投下の夕方、緊急召集された工月・高和の両中隊員（合わせて約 200 名）は翌 7 日早朝に西条駅から汽車で出発。海田市駅からは徒歩で行軍し、原爆投下後の惨状と残留放射線に晒される環境の中、東練兵場を経て爆心地に近い西練兵場（広島城）付近で救護活動や遺体の処理作業などに当たりました。高和中隊の残り 40 名も 8 日以降、随時出発をしました。

同じく、中国第 32053 部隊（広島地区第 17 特設警備隊）、通称「豊北部隊」（豊栄・大和・河内・福富など旧豊田郡北部の地域で組織）は、可部高等女学校を本部として 8 月 1 日から建物疎開作業を目的に広島市内へ入りました。榎町や西練兵場付近で作業をしていた隊員のうち、8 月 6 日の原爆投下によって 196 名が亡くなったと言われています。

(2) 工月 清 元中隊長の手記

「被爆五十年 隊員の想い」(賀北部隊友の会) から

一 部隊編成

8月6日午前8時15分米軍機B29により原爆攻撃され、午後、召集令状により旧西条農学校に集合、三ヶ小隊よりなる一ヶ中隊を編成し賀茂北部隊と称す。応召者 将校1名、短期現役出身下士官4名、未教育兵200余名(中学五年生を含む19才~23才位)

二 任務

速やかに広島聯隊区指令部の指揮下に入り、広島市内の警備、被災者の救援に任ずること。8月7日早朝西条駅を一番列車にて出発、海田市駅下車、広島周辺上空には敵機が二機飛んでいたのが警戒しながら東練兵場に入る。途中、重傷者を救出しながら、聯隊区指令官と連絡をとる。

三 担当地域と作業

西練兵場を中心とした一帯、電車通りから城北にかけての陸軍の中核地域で負傷者の収容、死者の処理などの任務につく。重傷者のウメキと散乱する死体の中で各小隊の担当区域を決めて、早速重傷者の救出より作業をはじめ。火傷、骨折、失明など熱波と焼煙にやられて氣息奄々とした重体である。死体は裸同然である。男性で軍袴様のズボンをはいた者は上体が裸で伏せの状態であり、女性の多くは反対に肩のあたりにポロ切を着けただけで両手を上に抱くような恰好で仰向けに転がっている。身許の確認できる者は一人もいなかった。

西練兵場に長方形の穴を掘り、散乱している木材などを下に敷き、その上に死体を約70体並べて毎日火葬した。7日以降、真夏のカンカン照りの炎天下死臭漂う中の重労働である。兵の疲労が重なり数名の脱落者が出る。日々の掘った穴の数、焼却した死体の数は不明であるが、5日間に焼却した事を思うと相当な数であったと思う。広島城の北の工兵学校と思われる校舎の焼け跡には、教室の入口に頭蓋骨が累々として重なっていた。一瞬の熱波の仕業であろう。濠端で、救援に来ていた旧友の軍医に遭って従軍中の話などを交わし、お互いに元気でやろうとあって別れたが、一カ月後にはその訃報に接した。

四 帰還

8月13日任務を終わり午後広島駅を出発して西条に帰り、午後4時西条農学校々庭で編成を解き中隊を解散した。当時、私は38才で歳もいっており凄惨な戦場経験もありましたが、何にもましてあの地獄絵は50年経った今でも忘れる事が出来ません。ましてや、当時、隊員の殆どの皆さんが多情多感な青年であり、大変な衝動を受けられたことと思います。あの熱い炎天下、汗と埃にまみれて負傷者を運び、多数の死体を焼却した隊員皆さんの苦労はなかなか忘れるものではありません。

二度とあのような惨事が起きないように、ひたすら願う次第で有ります。

(3) 賀北部隊原爆被災者救援之碑



建立時の碑 撮影 大石秀邦

左の記念碑は1987（昭和62）年、賀北部隊召集の地である西条中央公園（元 西条農学校跡地）の南側に、関係者有志によって建立されました。記念碑には、救援活動の概要と隊員の氏名が刻まれています。翌年、元隊員によって「賀北

部隊友の会」が結成され、以降、毎年8月7日に記念式典を開催してきました。また、被爆40年目にあたる1995（平成7）年には元隊員の手記集「被爆五十年 隊員の想い」が編集発行されました。近年、関係者の高齢化によって記念式典は中断しています。

東広島市立美術館の建設により、記念碑は西条中央公園の北側（東広島芸術文化ホール向い）に移設されました。



現在の碑 撮影 大石秀邦

5 広島県立西条農学校（現 西条農業高等学校）

(1) 学徒勤労動員

日米開戦を前にした1941（昭和16）年8月、国民勤労報国協力令が発令されました。各学校には学校報国隊が組織され、国内の労働力不足に対応する学徒動員体制が確立していきました。

実業学校としての使命にもとづき、西条農学校の生徒は北海道での援農活動をはじめとして地元地域の湿田の暗渠排水工事や開墾及び食料栽培、建設現場の地拵え作業といった農業・土木関係の作業が中心でした。また、校舎の一部やグラウンドには広島陸軍被服支廠の物資が積まれ、学生寮の一部は陸軍関係（賀北部隊）の本部及び仮兵舎として使用されました。

8月6日の原爆投下当日は、校内をはじめ県内各所で勤労作業に従事しました。その中で唯一、広島市内で勤労作業に当たったグループがありました。爆心地から1.7 km、現在の広島市中区吉島にあった食糧営団の製粉工場に動員された35名の生徒は、全員が工場付近で被爆。そのうち2名の生徒が重傷を負いましたが、幸い、死亡者はありませんでした。



西条農業高校同窓会提供

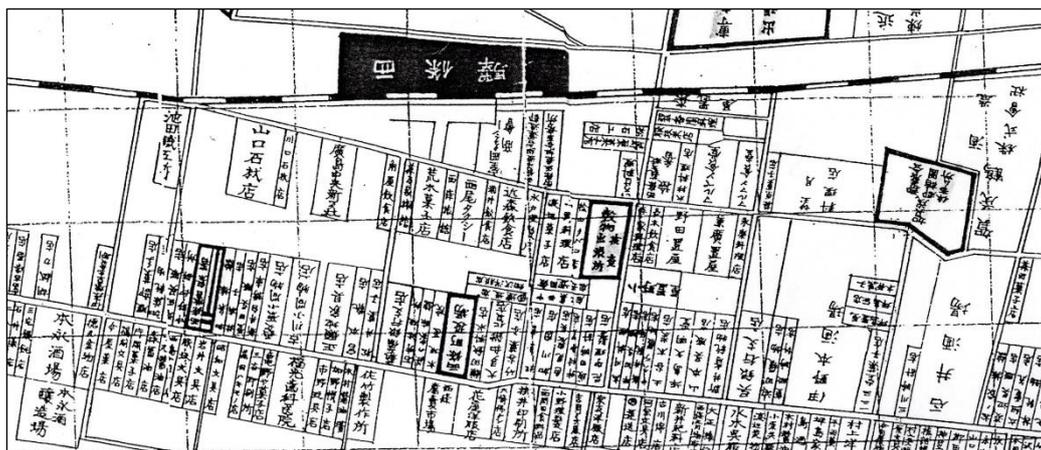
(2) 被爆者救護救援活動

① 西条町内での救護活動

原爆投下後、西条駅には昼過ぎから被災者が降り立つようになり、一時的に駅東側の料亭「望月」や酒造会社の酒蔵、そして西条農学校講堂へと収容されました。被災者の多くは重度の火傷を負っており、傷痍軍人療養所への移送には西条農学校生徒の活躍がありました。当時の様子について、林業科1年生だった平藤春三さんは、次のような手記（「西条農学校と広島被爆」東広島市原爆被爆資料保存推進協議会 編）を寄せています。

昼過ぎて1時頃、汽車が入ってきた。それは爆風でガラスがなく、中には天井もない列車で、見るも無残な姿の人達ばかり、私たちは皆、何回か担架に載せて療養所へ運んだ。

その中で、今も一番深く心に残っている人は、3回目に運んだ母子の姿です。母親は火傷の背中から血が出ていた。焼け焦げた下着1枚も千切れ、かろうじて局部を覆う状態。子供は無残でお母さんの乳房を吸っていた。運ぶ途中でお母さんは亡くなった。これを見たとき涙がボロボロと出て仕方がなかった。母性愛と原爆による哀れな人間の姿。余りにも痛ましい姿に、次の被災者を運ぶ力が出なかった。



昭和初期の西条駅周辺図

② 「よみがえった都市—復興への軌跡 原爆市長」(浜井信三 著) から

被爆当時、広島市の配給課長であった浜井信三氏(後に初の公選市長となる)は、家財一切を失い、着のみ着のままであった広島市民のために、広島陸軍被服支廠が所有管理する軍用被服一万梱(兵隊一人が身に着ける上から下までの被服十万人分)を譲り受けることになりました。ただし、製造された軍用被服は、川上村(現 東広島市八本松から西条寺家)の山中に疎開させてあったため、限られた期間の中で大量の梱をどうやって最寄りの駅まで運ぶかが大きな課題でした。浜井氏の義兄が西条農学校の教師をしていた縁で、大量の梱の搬送は、西条農学校の生徒が勤労奉仕で動員されることになりました。そのことを、浜井氏は著作の中で次のように記しています。

市内に軍服姿が氾濫した。道ゆく人びとは、ほとんど真新しい軍服を着て、雑嚢を肩にかけていた。裏町では、ブラウスがわりに、軍のオープンシャツを一着におよんで、水を汲んでいるおかみさんの姿も見られた。

「広島市は復員軍人だらけだ」当時、広島市を訪れた人たちは、そうって目をみはったものである。それにしても、その時の西条農学校の校長と職員、生徒たちの献身的な奉仕協力を、私は決して忘れない。

被服が疎開してあった川上というところは、西条駅から相当離れた山の中である。暑いさなかに、その山深いところから西条駅まで、大きな荷物を一つずつ担いでくださった労苦は、なみたいていのものではなかったのである。私はいまでもあの辺りを汽車で通るとき、当時のことが思い出されて、胸の中で手を合わせたい気持ちになる。

6 広島県立賀茂高等女学校（現 賀茂高等学校）

（1）学徒勤労働員

1941（昭和 16）年のアジア太平洋戦争開戦後の軍需部門を中心とする労働力不足に対応するため、1944（昭和 19）年には「女子勤労挺身令」が発令。そして学徒動員の通年化によって男性のみならず 12 歳から 40 歳までの女性も軍需工場などに動員されました。さらに、翌年 4 月からは 1 年間の授業停止が決まり、担任教師も動員先へと配属されました。



賀茂高校同窓会提供

① 第十一海軍航空廠での勤労働員

現在の呉市広にあった第十一海軍航空廠（広海軍工廠航空部から独立）へは 4 年生が派遣されました。最初の動員は 1944（昭和 19）年 6 月、現在の呉市横路中学校付近の女子宿舎へ寄宿し、約 2 キロメートル離れた発動機部第二工場（補機工場）で航空機部品の研磨作業等に従事。同年 9 月には三交代制の勤務となり、宿舎は現在の広古新開に位置した弥生宿舎へ移動となりました。空襲が度重なる中、爆撃を逃れるために山の斜面に掘られた大広隧道内の工場でも作業が行われました。



賀茂高校同窓会提供

② 広島陸軍被服支廠学校工場での勤労働員

1944（昭和 19）年 11 月から、賀茂高等女学校は広島陸軍被服支廠の学校工場となりました。3 年生の生徒は西・東・中のクラスごとに、本館 2 階の教室へ持ち込まれた多数のミシンを使用して軍人用の下着（シャツやズボン下）、雨外套の穴かがりとボタン付けなどの縫製作業に従事。広島陸軍被服支廠女子工員の指導のもと、作業時間は朝 8 時から、夕方 6 時まで続き、疲れが出てくる午後 3 時からは「特攻時間」と称し、無言での作業で集中力を高めたそうです。



賀茂高校同窓会提供

（2）被爆者救護救援活動

終戦により学徒動員は終了。広島陸軍被服支廠の学校工場は閉鎖され、動員されていた 3 年生は自宅待機となりました。また、第十一海軍航空廠に動員された 4 年生は、寄宿舎から帰宅した喜びもつかの間、8 月 15 日に広島県知事から被爆者救護の要請が入り、「賀茂高等女学校救護応援隊」の編成そして派遣となりました。11 名の先生とともに召集に応じた 4 年生と 3 年生の生徒第一陣が広島市に入ったのは 8 月 17 日。市内四カ所の救護所へ分かれ、過酷な環境のなか懸命に救護活動を行いました。活動は数度の交代を経て、約 1 か月続けました。活動した四カ所は本川国民学校（現 本川小学校）・大河国民学校（現 大河小学校）・第一国民学校（元 段原中学校）・広島通信病院（現 はくしま病院）です。

(3) 大庭みな子と原爆

後に芥川賞作家となる大庭みな子（椎名美奈子）は賀茂高等女学校3年生（当時14歳）に在学中し、爆心地に最も近い学校である本川国民学校で救護救援活動に当たりました。その過酷な体験については、小説や詩、エッセイなどで表現しています。



賀茂高校同窓会提供

「亡霊の囁き」（野生時代 1975年4月号 角川書店）から一部抜粋

昭和19年の春から21年の春まで、私は広島県の西条という町にいた。今は東広島市という名になっているが、当時は広島県賀茂郡西条町だった。西条の広島県立賀茂高等女学校で2年生と3年生を過ごしたのである。2年生の後半と3年生の前半を学業は放棄させられ、学徒動員でミシン作業をやらされた。学校が広島陸軍被服支廠の分工場になり、1日11時間の労働、休日は月に1日しかなかった。

食糧もなく、衣料もなく、考える道具は片っ端からもぎとられた。岩波文庫の赤帯を持っているというだけで自由主義者だと言ってなぐられ、ミシンの針を折ると、国家の貴重な資源をおろそかに扱ったと言ってなぐられた。兵隊さんのシャツを縫う代わりにあやまって自分の指を縫ってしまったときでさえそうである。病院で割れた指の間から折れた針を引きぬかれたとき、私は声をあげて泣きじゃくった。痛かったからではない。戦争とはこういうものだと言ふ子供心に胸がはりさけたからである。

終戦後1週間くらいして、多分8月20日すぎだと思うが、西条の女学校の生徒たちは広島島の焼跡の救護作業にかり出された。学校工場は解放して、学校の授業は復活するはずだった。しかし、実際問題として教科書も何もないのである。今までの教科書は全部嘘が書いてあり、いけないものだと言ふことであつた。そこで、ぶらぶらしている学生たちは救護作業にかり出されたのである。

それは太陽のぎらぎら輝く日だった。私たちは作業服にリュックを背負って広島に着いた。防空頭巾を持たないで歩くということに私たちはとまどっていた。もはや、空襲がないということが、私たちを別の不安にただよわせていた。国が破れ、空だけが青く、太陽が輝いているということが耐えられないものに思えた。

私たちが配属されたのは本川小学校というほとんど爆心地に近い救護所だった。そこには三百人ばかりの負傷者たちがコンクリートの床の上にごろごろと腐った魚のように並べられていた。男と女の区別さえほとんどつかなかつた。腐りながらうごめいている。眼を見開いて、唇をひらき、蠅を追っている地獄の住人である。彼らのからだは深くえぐられ、そのえぐられた血みどろの溝に、一面に盛りあがって何百という蠅が飴色の行列をつくっていた。彼らは蛆に覆われていた。背中にも、腕にも、肩にも、腹にも、脚にも、のどにも、頬にも、唇の脇にも、脛にさえも、蛆が這っていた、髪の毛は帽子の形を残して丸く焼け、睫毛も焼き切れ、皮膚は、皮膚の色をしていなかった。

彼らは次つぎに死んだ。毎日数人ずつ、毎日の作業は、生きている者の中から確実に死んだ者を選び分ける仕事だったのだ。私たちは炊事班と称していたが、私たちの配る雑炊を食べられた者が、果たしてどれくらい居ただろう。居たとすれば、死んでいく者を見とる者だけだっただろう。そこにいた三百人の負傷者たちの全員が、遅かれ早かれ息をひきとったのではないかと、私は思う。私たちはそれを、ただ眺めているしかなかったのだ。

(4) 原爆でわが子を失うということ

賀茂高等女学校三年生の上田茂子さんは、在校生では唯一の原爆犠牲者となりました。母親のあや子さんは、八本松町「原村史」（昭和42年発行）に次の手記を寄せています。

原村史（上巻）「あの日に二児を失って」（上田あや子）

「昭和二十年八月六日、原爆の悲劇」。二六時中忘れることのできないこの世の生き地獄。原爆二十年。犠牲になった二人の子の歳を数えてまた新たな涙に暮れる。私は四人の子宝を喜びとし、誇りにもしていた。長男は暁部隊に入隊し、次男は学生であったが、これも飛行隊にはいたいと、東京から希望をいつてきた。二人とも戦死すること覚悟せねばならぬ。寂しかった。

長女茂子は賀茂高女の三年生であった。学校は軍隊の被服廠に工場化した。四年生が挺身隊として呉や広の工場に出向ったあとは、三年生が代ってミシン仕事に当った。日曜も祭日もない。帰ると「お母ちゃん足が痛いよ」と訴える。暑さと疲れで痩せていた。それでも毎朝女子挺身隊の鉢巻姿で元気に自転車のペダルを踏んで出かけた。「今日はB29が学校の上を飛ぶので仕事にならなかった」と報告する。いろいろなニュースも聞かせてくれた。三男信彦は松本工業の二年生で、動賛されて国鉄電気部で働いた。

八月五日、大手町八丁目の親戚の伯母の灰葬であった。その日は日曜で特に休みだったので、長女は三男と共に広島に来てくれた。前日の葬儀には私たち夫妻が列席したが主人だけ夕方原に帰った。子供等は主人の代わりに来たのだ。灰葬もすみ私と長女は夜汽車で帰村する積りで広島駅に出た。子供二人が切符を買う行列に加わった。切符の数に制限があるのでとうとう買うことができなかった。それでは明朝にしようと私は馬木の生家に、子供等は大手町にと分れて泊まった。

翌朝子供等は切符を求めに駅に来た。今度は切符を買うことができた。駅で二人は私をまっていた。長女は忘れ物に気付き大手町へとりに行った。三男も出た。長女は駅に引き返す途中原爆にやられて行方不明。三男はあとでわかったのだが、鷹野橋で爆風に倒れた。私は広島駅で落ち合うことにしていたが、パスに乗りおくれ途中でピカにあった。きっと広島駅に爆弾を落したのだと無我夢中で大洲橋まで馳せつけたが、そこで消防団に押し止められた。市内へ一歩も踏み入れられない。子供等はどのようにしているだろう。ぞろぞろ市内から引きあげるのは、顔や手足など露目した部分を大火傷の人ばかり。目もあてられない。二人の子供は汽車に乗ったろうか、こちらに歩いて来ないか、夕方まで待ったが帰って来るのは知らない人ばかり。ふと考えた。道がちがって海田駅から原に帰ったかも知れぬ。海田駅まで歩いた。海田では見つからない。急いで原に帰った。原では私等三人が帰るのを待っているのだと両親がいう。これはどうしたことか、泣いても泣ききれず、前にも進まねず、後にも去られず、六日の夜はまんじりともしなかった。火傷には渋柿が良いということなので、夜中青柿を沢山もぎとり、それに二人の着替一切、果物・菓子・水筒と万一のことがあったらよくなるまで看護してやろうと、一週間分の食料を用意して主人と夜の明けるのを待ちかねて八本松に急ぎ、四時過ぎの汽車に乗った。

海田市の寺院・学校・収容所を訪ね、茂子よ信彦よと、主人と代る代る呼び歩いた。船越・向洋・府中とつぎつぎに収容所を尋ね廻った。市内は火の中でとても歩けない。東練

兵場に来た。倒れて虫の息の人、髪を切った兵隊さんたち多勢倒れている。

ふと婦人従軍歌を思い出した。一線で働いて軍人はみなこのとおりであろう。長男も二男もこのようになるのだろうと声を立てて泣いた。ここに倒れている皆さんの親御も同じ思いで待っていただけることだろうと、念珠を出して拝んだ。あるお寺の収容所で「おじさん、おばさん」と呼んでくれる人がある。誰れかさっぱり判らない。「渡辺です、藤保です」という。びっくりして近寄って見ても渡辺さんのようがない。顔も手足も腫れ上がり、まる裸の全く変りはてた姿である。ただ聞きなれた声だけでたしかめた。「御両親に生存されていることを知らせてあげるから頑張りなさいよ」と言い残して分れた。「水を飲ませて」と訴える声、声。はじめは少しずつ飲ませていたが、「水を飲ませると急に死ぬ」という話も聞いているし、我が子に飲ませるのが無くなってはと、水筒を見せないことにした。あの時ばかりは心が鬼になったと思った。

同じ収容所で、全裸で、腫れ上がって目も見えず、水腫れがずるずる潰れ、肌の皮が破れて襦袢が下がったような姿で、ただ「木をくれ、痛いよ、痛いよ」とうめく人。片息の人。狭いバラックへ何百人も収容されて手の施しようもない。日陰にかつぎ込まれたのは幸運な方で、焼けつくようなカンカン照りの下でうめいている人が多い。どうしようもない。我が子もどんなにか私を待っているだろう。早く逢いたいとあせるばかり。七日も暗くなって歩けない。欠賀町の親戚で一夜を明かした。夜が明けるとまた二人は麦わら帽に相変らずの姿で出かけた。

八日には市内の火もあらかた消えたので、第一番に広島駅付近を探し廻り、つづいて鷹野橋辺に行った。広い広島市も一面の焼野原。残るは鉄筋コンクリートの残骸と水槽だけ。主人の後について泣き泣き見当もなく歩き廻った。地面はまだ火気があるところへ、真夏の暑さに、汗と涙で手拭は幾度しぼったことか。何千何百の死体を見ながら、時には手をかけ動かして見たり、モンペの柄をしらべたりした。県庁前の水槽や鷹野橋までの水槽の中で、五、六人ずつ立ったままの女学生の焼死体。可愛想にさぞ「お母ちゃん、お母ちゃん」と呼びつづけたことであろう。合掌せずにはおられない。

八日は出汐町の親戚に宿泊。九日は宇品方面、似島、鯛尾島を予定し、先ず宇品収容所へ。そこでしらべると、上田信彦鯛尾島暁部隊と出ていたので二人は大喜び、さっそく鯛尾島に渡った。係りの軍曹が「昨夜苦しんでよく眠っていないので静かに休ませてやってくれ、ひどい火傷だから」といった。すぐ面会させてくれた。「信彦ちゃん……お父ちゃんもお母ちゃんも来たよ」信彦は涙を浮かべ「お母ちゃん、僕はね、鷹野橋で爆風にやられ、一間ほどはね上げられ俯伏せに落ちた。それから兵隊さんの車で宇品に運ばれた。お姉ちゃんは忘れ物をとりに西本（大手町の親戚）へ後返ししたので、きっと原に帰っておる」と話してくれた。「お母ちゃん、お母ちゃん」と呼ぶ。頭元で、持ち歩いた果物や水筒の水をあげようかという、「ここにまだみかんがある。毎日みかんをもらうからいらぬ」と満足していた。「お母ちゃん、井戸の冷たい水を茶碗へ一杯飲ませて、それから家の前の倉庫のサイダーを飲ませて頂戴」と頼む。夫妻で相談した。たしかなようだから大丈夫だろう。主人がサイダーをとりに原に帰り、長女が帰っておるか見てくる。私は残って看護するということにした。どこが痛いかと尋ねると、それには答えず、ただ、冷たい水とサイダーが飲みたいというばかり。そこへ兵隊さんが来て「静かに、静かに」という。足もとにさがり足をさすっているうちに鼻汁を出し、眠っているのに呼吸は大きくなり容態が

急変した。主人はまだよう帰らずに外にいたので呼び込んだ。もう話もできない。意識は不明になった。私は手を握り、脈を見ていた。信彦ちゃん、信彦ちゃんと呼んでも返答もない。吐く息も次第に細りついにとまった。両親の顔を見て家に帰った気持になって永い眠りについたのであろう。冷たい水も無く、サイダーも飲ませなかったことが一生忘れられない憾みである。今でもサイダーを見ると思い出す。胸が一杯になる。思い詰めると胸が板をはせたようになる。三日間持ち歩いた着替えも間に合わず、柿の渋も用をなさず、葡萄も菓子も口にせず哀れな全裸で永い眠りについた。思い出しては「ああ、可愛いや可愛いや、主人や私への善知識であった」と感謝せずにはいられない。死体は兵隊さんがさっそくタンカに乗せた。お経をあげるひまもない。髪の毛と手の皮と爪だけ持ち帰って葬儀をした。

今度は長女が気になる。似の島に渡った。収容所を調べたが名簿には無い。あれでもと大きな声で呼び歩いたが結局駄目であった。しかしもう帰る船がない。仕方なく島で一泊した。十日字品に着き、江波・吉島等の収容所・防空壕・飛行場と尋ね歩いた。死体はもう悪臭を放っている。それでも調べられるだけ調べた。各所で死体を火葬していた。江波では飯盒炊さんで野宿した。十一日は己斐収容所・学校と聞いては転々と歩いた。焼け残った田舎で歩いてなかなか行かれないのは横川や草津であった。己斐では蚊にさされながら馬車の上で一夜を明かした。死体も焼かれてほとんど片付き、市役所で名簿が整ったとこのことで調べてもらったが、上田茂子の名は無かった。やむを得ず一応家に帰って茂子が帰っていないならばまた尋ねに出ることにした。己斐から広島駅まで歩いたが、何の目標もない。広い広い焼野原で、一木の杖が欲しくてもそれさえない。二人は心身ともにほんとは成れ果てた。「茂子は原に帰っておる」といった信彦の言葉を信じ、信彦の死体を抱きしめて我が家に帰った。家にはいるや「伯母さん茂子は」と尋ねた。伯母は「だれも帰っていないよ」という。この一言で張り詰めた精も魂も尽き果て、気が遠くなり土間に泣き伏したままであった。仏壇の前にいつ行ったか覚えがない。(中略)

本川橋ぞいの川縁は死体で埋めつくされ、川をのぞけば砂の中に手足を突っ込み流れもせず沈んでいる人、人、鷹野橋の川筋もやはり同じである。それから八丁目までの道路らしいところを、原から持参したスコップと鍬で、胸につけていたネームともんぺの柄をたよりにさがすことにした。翌日は近所の方々が二度目を探しに来て下さった。大変御世話をかけた。こんなにして二週間尋ね歩いたが何の手掛りもない。そこで思いを変えて山口県境大野村までの救護所をさがすことにした。救護所や警察を聞き尋ね、何度も無駄足をふみながら歩き廻ったが、どこにも名簿に乗っていない。宮内・大野、宮島にも無い。こんどは芸備線にはいることにした。戸坂・狩留家・深川にも無い。いよいよ三次にもいないことがわかり、あきらめがついた。同時に精魂が尽きたのか、可部警察で倒れた。親切なお巡りさんが近所のマッサージ師のところに連れ込み、治療させてくれた。やっと杖にすがって歩けるようになり、電車で横川に出た。広島駅まで杖を力に歩き、やっと汽車に乗った。今まで酔ったこともないのに中野駅の手前で眩暈がして車中に倒れた。中野駅に下ろして手当をしてもらった。中野駅から八本松駅に連絡して原から迎えに来るように計らってもらった。家に帰って両親に深く詫びた。頭が上がるようになって、広島市内を探しだしてから約半月を経ていた。家の者が「お前が倒れてはいけない、もうあきらめよ」というがどうにもならない。なぜあの時一緒に死ななかったかと愚痴も出る。(後略)

7 各町村の警防団及び警察署管内の医療班などによる救援活動

(1) 警防団

旧賀茂郡内の警防団（空襲や災害から市民を守る警察や消防を補助する団体）に所属する多くの町村民が、被災した広島市内に入り、残留放射線の影響が残る中、8月6日から8月中旬にかけて、救援物資の運送やがれきの片づけ作業等に当たりました。

旧郡名	現地域名	旧町村名	述べ人数
賀茂郡	黒瀬	上黒瀬村・乃美尾村・中黒瀬村・下黒瀬村	約 75 名
	西条	西条町・郷田村・板城村・下三永村	約 1815 名
	志和	東志和村・志和堀村・西志和村	約 480 名
	高屋	造賀村・西高屋村・東高屋村	約 50 名
	八本松	川上村・原村・吉川村	約 960 名
豊田郡	福富	久芳村・竹仁村・上戸野村	約 280 名

(2) 医療班

旧賀茂郡の西条警察署及び旧豊田郡の河内警察署管内に位置する各医療機関からも多くの医師や看護師らが、被爆直後から9月下旬にかけて広島市内各所で医療活動に当たりました。表の西条署管内の数字には先述した傷痍軍人広島療養所救護班の数も含まれます。

警察署	医師	歯科医	薬剤師	看護師	事務補助	延べ人数合計
西条署管内	146 名	3 名	9 名	328 名	60 名	546 名
河内署管内	69 名		3 名	81 名		153 名

（両資料とも「広島原爆戦災誌」及び「被爆四十周年賀茂台地の声」から作成）

8 日本赤十字社広島原爆病院（現 広島赤十字・原爆病院）院長 重藤 文夫 氏

1903（明治 36）年に西条町下見で誕生。通勤途中の広島駅で被爆後、駅北側の東練兵場へ避難。運よく西条からの救援トラックにひろわれて帰宅。その翌日から全焼した広島赤十字病院内で懸命に医療活動を続けられました。

戦後は 1948（昭和 23）年に病院の院長となり、被爆者の白血病発現率の高さを突き止めるなど「原爆医療」の道を切り開かれました。さらに 1956（昭和 31）年に開院した日本赤十字社広島原爆病院でも院長も務め、1957 年（昭和 32）年の原爆医療法や 1968（昭和 43）年の原爆特別措置法成立に向け、被爆者の側に立って意見を述べられました。



東広島市ホームページ（名誉市民）から

1982（昭和 57）年 7 月に東広島市名誉市民として顕彰された後、同年 79 歳で逝去されました。

「つながろう！ 次へつなごう！ 戦時体制と戦争そして被爆の実相を」

次世代による東広島戦争・原爆体験継承ネット
<http://pebehh.net>